彦根市埋蔵文化財調査報告書第 43 集

丁田遺跡 I

－浸水対策下水道工事（高宮新川第１排水区）に伴う発掘調査－

平成 21 年 3 月

彦根市教育委員会

目　次

例言
Ⅰ　はじめに ―――――――――――――――― 1
Ⅱ　位置と環境 ―――――――――――――――― 1
Ⅲ　検出された遺構 ―――――――――――――― 3
Ⅳ　出土遺物 ―――――――――――――――― 7
Ⅴ　おわりに ―――――――――――――――― 9
写真図版

例　言

1．本書は、彦根市より申請のあった浸水対策下水道工事（高宮新川第１排水区）に伴って彦根市教育委員会が行った発掘調査の成果を収めたものである。
2．本調査の調査地は、彦根市高宮町地先に位置する。
3．本調査は、現地調査を平成20年6月16日～平成20年7月10日の間実施し、のちに整理調査を行った。
4．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

文化財部長：西川太平	文化財部次長：寺嶋　勲
課　　長：谷口　徹	課 長 補 佐（兼史跡整備係長）：久保達彦
係　　長：広瀬清隆	主　　査：志萱昌貢
副 主 査：北川恭子	主　　任：池田年人
主　　任：高木絵美	主　　任：林　昭男
技　　師：大岡由記子	技　　師：三尾次郎

5．本調査には以下の諸氏が参加した。
吉原正興・池端清・片山正範・西村義幸・中田鉄雄・田部健次郎・藤原輝雄
6．本書は三尾次郎が執筆した。
7．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

Ⅰ　はじめに

調査地は彦根市高宮町地先、太田川と国道８号線が交差する地点の北東に位置する。調査地の周囲はもともと田地が広がっていたが、西側は既に宅地開発が進んでいる地域である。今回の調査は、彦根市による浸水対策下水道工事（高宮新川第１排水区）に伴う緊急発掘調査である。平成20年３月25日に試掘トレンチを５箇所設定して試掘調査を行った結果、東側の２箇所で遺構を確認した。これに伴い平成20年６月16日から平成20年７月10日まで本発掘調査として現地調査を実施し、その後、整理作業を行い本報告書の刊行となった。

Ⅱ　位置と環境

［地理的環境］

高宮町は、彦根市のほぼ中央に位置し、南東から北西に流れる犬上川の右岸に所在する。犬上川は、河岸段丘を形成しながら犬上郡多賀町の橋崎周辺を扇頂として西北方向に扇を広げたように広がる扇状地を形成する。このために川水の浸透が著しく、小河川は伏流し常時は表面に水流が見られず、降雨時のみ水流の見られる水無川となる。犬上川扇状地の場合、標高約 100m から 95m 附近が湧水ラインで、伏流水が自噴するという典型的な扇状地地形を形成している。今回の調査地も例外ではなく地理的に上位に位置する南方に複数の湧水が見られ、水田は豊富な水量に恵まれている。

図１　遺跡位置図

[歴史的環境]

丁田遺跡が所在する高宮町周辺には、縄文時代以降、多くの遺跡が分布（図1）しており、過去人類の生活相は非常に濃いといえる地域である。

古墳時代前期末には、市域ほぼ中央部の荒神山の稜線上に全長約 114m の前方後円墳である荒神山古墳（平成 16 年に市指定史跡に指定）が築かれる。

古墳時代後期になると犬上川扇状地の扇頂附近には楢崎古墳群・北落古墳群・塚原古墳群（甲良町）などの群集墳が形成される。また、扇状地より下位の氾濫現部分においても古墳群は形成され、横地遺跡や段ノ東遺跡・葛籠北遺跡では円墳・方墳が検出されている。これらの古墳群には渡来系の集団の存在をうかがわせる遺物が確認されており、扇状地の開発に関係した集団であると考えられる。また琵琶湖岸においては、普光寺遺跡や八坂東遺跡で後期のものと考えられる埴輪の破片が出土しており、削平古墳の存在が想定されている。

白鳳・飛鳥時代に入ると当地周辺には白鳳寺院の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡が確認できる。奈良時代には官道である東山道が当地を南西から北東に貫き、尼子西遺跡（甲良町）では、側溝を伴った道路跡が検出されている。このころには竹ヶ鼻廃寺は大規模な掘立柱が整然とした区画で検出されており、円面硯や銅匙が、また品井戸遺跡では石帯が出土している。これらのことから竹ヶ鼻遺跡と品井戸遺跡周辺が犬上郡の中心をなす地域であったと想定できる。

中世においては、現在の高宮小学校の位置に鎌倉～戦国期に当地を支配していた土豪である高宮氏の居城、高宮城の存在が推定されており、過去の調査では堀跡や当該時期の遺物が出土している。

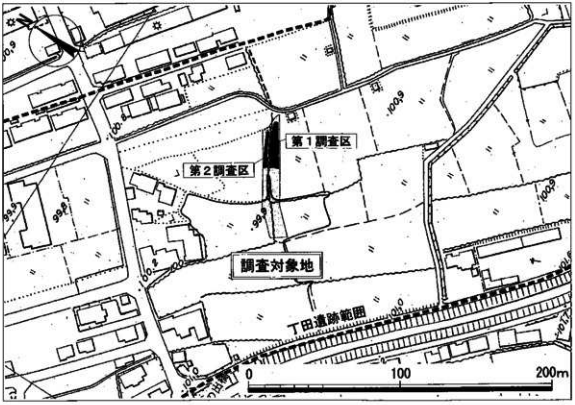


図２　調査区位置図

Ⅲ　検出された遺構

調査区は、中央に流れる既存の開渠排水路が現在も使用中のためにそれを避ける形で、2つの調査区に分けて調査を行った（図2）。南側の調査区を第1調査区、北側の調査区を第2調査区とした。第1調査区は現況で水田が営まれており、北側の第2調査区は休耕田となっており、雑草が覆いしげっている現況であった。申請範囲の南西側については田地が一段（約30cm程度）下がり旧地形を反映するものと考えられる。

基本土層としては、第1層が表土としての暗灰色粘土層（耕作土）、第2層が暗黄灰色土粘土層（床土）、第3層が遺構面になり暗橙灰色粘土層である。調査区の南西側については遺構面が傾斜し下がっていく状況で、第2層の田地耕作に伴う床土が厚くなっていく、このため表土は比較的平坦な堆積を見せる。平成20年3月25日に行った試掘調査（図3）でも、今回の本発掘調査区の範囲より南西方向については傾斜してく状況が確認できており、先述したように一段下がった申請範囲南西部分では、一段下がった地表面から更に約60cmの深さで明灰色シルト層のグライ化した層が確認できており、旧河道であると考えられる。また、調査区の北東端でも旧河道が検出されており、旧河道に挟まれた微高地状に遺構が検出される形となっている状況であり、今回の調査区（図4）では、北東側を中心に遺構を検出し、西側に向かうにしたがって遺構密度が少なくなる傾向を示す。第2調査区については、後世の削平が著しく、第1調査区と比較して15cm～20cmほど下がって遺構面である暗橙灰色粘土層が検出された。また、現在までのゴミの廃棄坑が複数存在し、遺構面は荒れた状況であった。

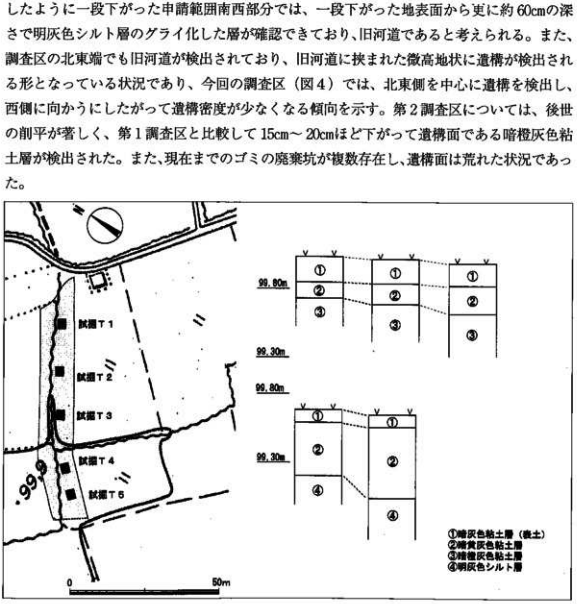


図3　試掘調査区位置図及び土層柱状図

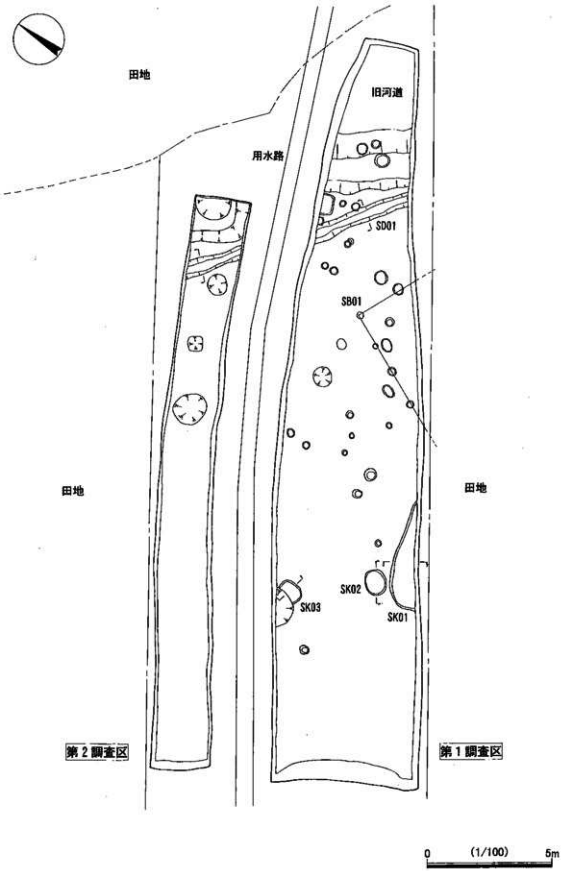


図４　遺構全図

今回検出された遺構としては、調査区のほぼ中央に掘立柱建物SB01（図５）を検出した。掘方を含めた径は概ね25～30cmを測るものである。柱間は心々で150～170cmを測り梁行の間隔は若干広く約190cmを測る。柱穴の規模も他のものより大きく深いものとなっている。柱穴の埋土は基本的に３層の堆積が検出されており、柱痕部分が灰オリーブ色粘土層でやや粘性が強く、掘り方については上位の灰色粘土層と、下位のオリーブ黄色砂質土層（橙褐色粘土ブロック混じり）によって構成されている。掘り方については柱痕部分の埋土よりも比較的締まっている。南北方向の桁行はほぼ直線上を通り、この桁行を軸として、N－24°－Eの方向軸を持つものである。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかった。また、遺物の出土がなかったため詳細な時期は不明である。

調査区東側で第１調査区と第２調査区を貫くN－55°－Wの方向軸を持つ溝SD01（図６）は、出土した灰釉陶器の小片から平安時代末期を遡るものではないと考えられ、且つ方向軸が犬上郡条里と同方向のものであり、条里との関連が考えられるものである。遺構面からの深さは約10cm、幅約42cm前後を測るものである。断面形状は弧状の単純なもので、埋土は上層から浅黄色粘土層、暗黄灰色粘土層、黄褐色粘土層が堆積しており、中位の暗黄灰色粘土層より平安時代末期期と考えられる灰釉陶器の小片が出土している。

調査区の南西側、柱穴の密度が薄くなっていく位置で、土坑SK3基（図６）を検出した。

SK01については調査区の南端にかかるもので、平面形状は不明であるが、深さ約20cmを測るものである。埋土は上層から明黄褐色粘土層、黄褐色粘土層が堆積している。遺物が出土しなかったため時期は不明である。

SK02については、SK01に隣接して検出されたもので、深さ約17cm、直径76cmを測る円形の土坑である。埋土は上層から明黄褐色粘土層、黄褐色粘土層、暗黄褐色粘土層が堆積している。遺物が出土しなかったため時期は不明である。

SK03については、耕作に伴うものと考えられる井戸により攪乱を受けている状況である。深さ約26cmを測るものであり、埋土は上層から明黄褐色土層、黄褐色粘土層、暗黄褐色粘土層が堆積している。遺物が出土しなかったため時期は不明のものである。これら３基の土坑については時期不詳であるが、埋土が共通した土層堆積を見せることから同時期に埋没したものとも考えられる。

また、調査区東端では旧河道（図７）が検出された。これは最深部で深さ約45cmを測るもので、大まかには３層に分かれており、上層（図７の⑦⑫⑬⑭⑮）が奈良時代前期から平安時代末期までの遺物を包含し、次に古墳時代後期の遺物を包含する若干細砂を含む層（図７の③④⑤⑥⑧⑪⑯）が堆積し、最下層（図７の⑨⑩⑰）は無遺物の砂質層になる。堆積状況から古墳時代の後半頃までは流れを持っており、その後滞留して平安時代末期に完全に埋没したようである。上層部分で出土している遺物と、SD01で出土している遺物が時期的に近いものであることから、最終の埋没は条里施行に伴う耕作地の開発によるものである可能性が

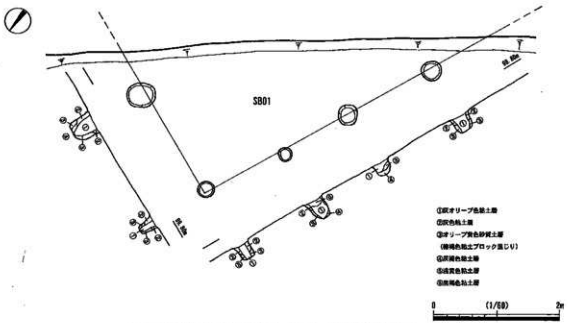


図５　掘立柱建物 SB01 平面プラン及び柱穴断面図

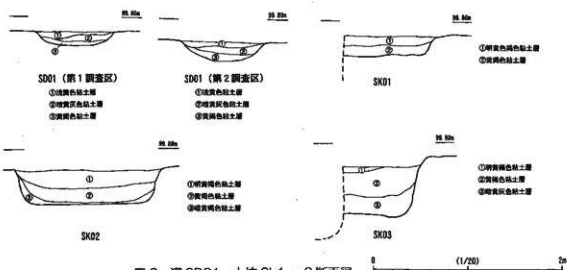


図６　溝 SD01・土坑 Sk1 ～３断面図

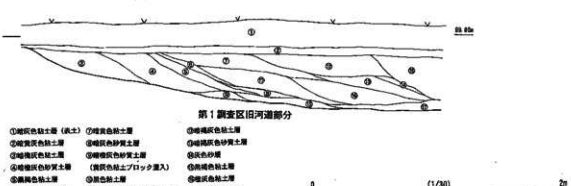


図７　旧河道断面図

考えられ、平坦な耕作地を形成するための耕地開発の結果と考えられる。また、上層面には時期不詳であるが柱穴が検出されており、最終の埋没後は遺構面として捉えられるものである。

第２調査区については、戦術のとおりSD01の延長以外の遺構は確認できなかった。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物（図８）は概ね北東端の旧河道からの出土である。層位的には上層（図７の⑦⑫⑬⑭⑮）からの出土が中心であり古代末の遺物が中心となっている。中位の層（図７の③④⑤⑥⑧⑪⑯）からは古墳時代後期と考えられる須恵器の坏身１点が出土している。下層（図７の⑨⑩⑰）については遺物の出土はなかった。その他、遺構からも遺物の出土はあったが、小片のため図化及び時期を検討できるものは図８出土遺物の３と８がSD01の中位から出土しているのみである。

１は、須恵器坏身である。全体として扁平な形状を呈するもので、底部には切り離しの際のヘラ起こし痕跡がそのまま残る。受け部はやや外上方に立ち上がるもので、返りは内湾し、端部は丸くおさまる。古墳時代後期の所産である。

２～４は、須恵器坏蓋である。径は17cm前後、を測る。焼き歪みがみられ宝珠つまみの位置がややずれる。端部はつまんで仕上げられており、断面逆三角形を呈す。２のものは端部がやや内傾する。武器壁はやや肉厚なもので中ほどがやや肥厚する。宝珠つまみは扁平なもので、つまみ部分の径は約3.1cmを測るものである。蓋上面のヘラ削りは比較的丁寧に施されている。

５は、須恵器坏身である。端部は外面に強い回転ヨコナデの痕跡が見られ、端部はやや外反する印象となる。

６・８は、灰釉陶器の底部である。内面の灰釉は摩滅してしまっている。６については、断面三角形の貼り付け高台がやや内側に反り、三日月高台状をなす。底部切り離しの際の糸切り痕跡は摩滅のためにほとんど可視できない。

７は、須恵器坏身である。高台を持たないもので、底部はやや厚手であり、ヘラ起こしの痕跡が見られる。

９・10は須恵器坏身である。貼り付け高台は断面四角形を呈し、10に関しては側面をナデることで、端部がやや凹状になる。高台部分から底部は横方向に張り出し、湾曲して後は直線的に立ち上がる。高台は内側が低く、外側が高くなっており、内側で接地する形となるものである。

11は山皿である。内湾して立ち上がり肥厚した後に端部はやや尖った印象となる。胎土は砂粒を多く含み、色調もやや暗い。

12～15は、灰釉陶器の椀である。12については内湾した後に口縁部分がやや強くナデられ、

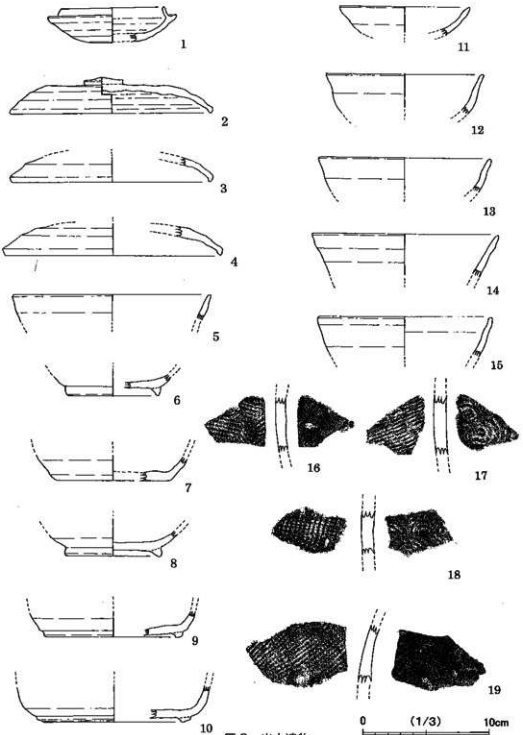


図8　出土遺物

器壁が薄くなって外方に反る。13についても同様の形状であるが器壁は一定の厚さで、端部は単純に丸くおさめる。14については端部やや下方が肥厚し、端部がやや尖った印象となるものである。15は、口縁部がやや内湾曲し、端部が比較的に面をなす。

16～19は小片であるが須恵器甕の小片である。時期の詳細が判断できるものは存在しない。

16・17に関しては、外面に平行タタキが見られ、18・19に関しては格子タタキが見られる。内面にはいずれも同心円の当て具の痕跡が見られるが、16及び19に関してはナデによって消されている。

このほかに、今回の報告では図化していないが、表面採集資料として多数の遺物が採集できており、本来相当数の遺物が存在していたものと考えられ、散布の状況から田地の耕作による攪乱を受けていることが伺える状況である。表面採集の遺物内容は、古墳時代後期から近世に至るまでの時間幅を持ち、当遺跡周辺の集落が断続的ではなく、ある程度連続していたことを伺わせる資料である。

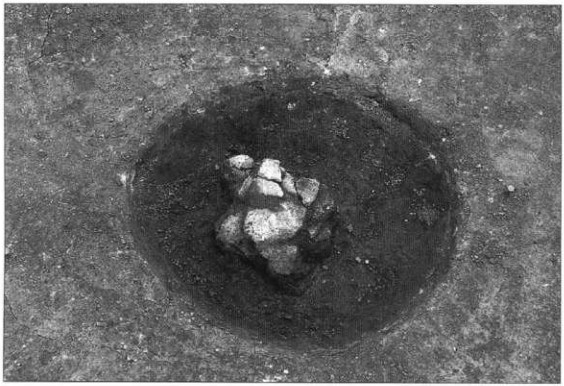
V　おわりに

今回の調査では、掘立柱建物SB01が1棟と溝SD01が1条、土坑及び柱穴が複数基検出された。掘立柱建物については、N－24°－Eの桁行方向を持つもので、今回は1棟のみの検出であったために集落を検討できる資料ではないが、当遺跡で初めての建物跡の検出であることから、丁田遺跡の集落を考える上での今後の貴重な資料となる。また、溝については、第1調査区と第2調査区を貫く形で検出されており、N－55°－Wと犬上郡条里と共通する方向を持つことから、条里に関連する遺構であると考えられる。出土遺物から平安時代末期を遡るものではないと考えられ、当地においての条里制の施行を考える上で重要な資料といえる。出土遺物が少量であり、層位的にも中位からの出土であることから溝の使用年代を言及できるものではないが、当遺跡において発掘調査は初めてのことであり、少なくとも平安時代末期には当地に条里制が施行されていたことを検討していくための資料であるといえる。旧河道については、平安時代末期には埋没していたと考えられるもので、上面に時期は不詳であるが柱穴を検出していることから、埋没して以降は最上層上面を遺構面として捉えることができる。上層については、隣接する溝SD01と出土遺物の時期幅が近いことから、条里制施行に伴う耕作地の開発が、旧河道埋没に関係しているとも考えられる。

また、試掘の成果も踏まえた今回の調査では、調査区の北東端と南東端にそれぞれ旧河道が存在し、それぞれ落ち込んでいく形で傾斜する。掘立柱建物及びその他の遺構は落ち込みに挟まれた微高地に立地しており、当地の集落の立地及び周辺の環境を考える上で一つの情報として貴重な成果である。

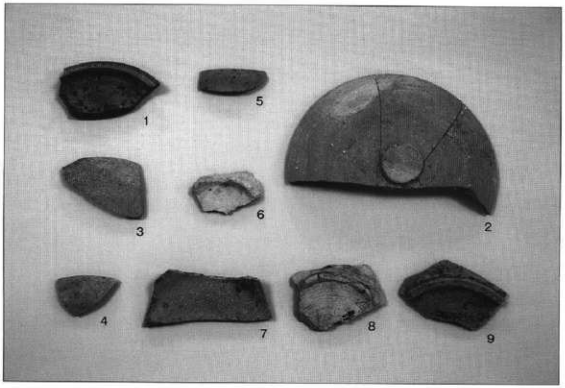
調査地全景（北東より）

旧河道及び SD01

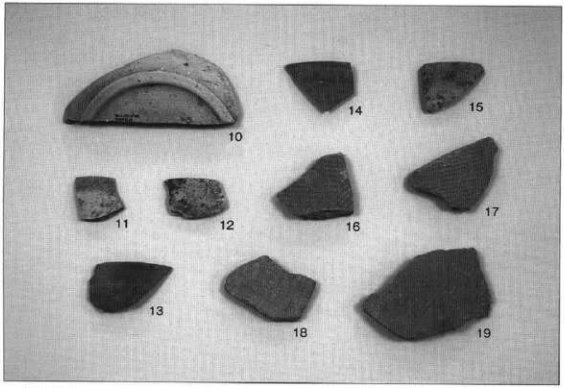


遺物出土状況

発掘調査作業風景



出土遺物



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちょうだいせき1
書名	丁田遺跡Ⅰ
副書名	浸水対策下水道工事（高宮新川第1排水区）に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	43
編著者名	三尾次郎
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号　TEL0749-26-5833
発行年月日	20090331

所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
丁田遺跡	彦根市高宮町地先	25202	139	35度14分23秒	136度15分11秒	216㎡	20080616～20080710	浸水対策下水道工事（高宮新川第1排水区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丁田遺跡	散布地	平安時代	掘立柱建物 溝 土坑 旧河道	須恵器 土師器	

彦根市埋蔵文化財調査報告第43集

丁田遺跡Ⅰ

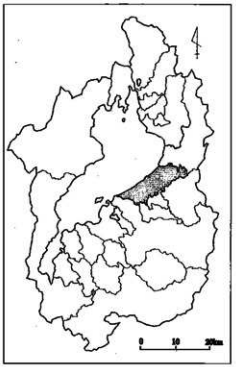
－浸水対策下水道事業（高宮新川第1排水区）に伴う発掘調査－

平成21年（2009年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
彦根市尾末町1番38号
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：共栄印刷株式会社

SITE OF CHODA



March, 2009

Hikone Educational Bureau
Ciltural Asset Division